

《第 464 回 (2019年6月13日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：6人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『星の旅人 伊能忠敬と伝説の怪魚』 小前 亮／著 小峰書店

伊能忠敬が江戸時代、『大日本沿海輿地全図』というきわめて正確な日本地図を制作したことは、みなさんご存知のことと思います。今月の課題本は、伊能忠敬隊がこの地図を製作するために行った測量の旅をテーマにした歴史物語です。物語は、数えて56歳になる伊能忠敬が、次男の秀蔵や従者とともに第一次測量に出発するところから始まります。メンバーには、行方不明になった父を探すという使命を持った上林平次という少年も加わります。平次は架空の人物ですが、実際に忠敬たちと旅をしていたかのように生き生きと目の前に現れ、物語にスリルを与えてくれます。

この測量の旅は、簡単なものではありません。一定の歩幅で1日40キロも歩く上に、曲がり角に差し掛かるたびにその角度を測り、夜は天体観測をして正確な現在位置を図るという、休む間もないような地道な作業です。しかし、この1つ1つの作業が、誤差の少ない日本地図を作製するために不可欠だったのです。物語の随所には、時代背景や当時の測量技術についての解説があり、物語を楽しむ手助けをしてくれます。

親戚の心配や、「年寄りの冷や水」という陰口も気にせず、日本史に残る一大事業の第一歩を踏み出した忠敬。正確な測量を、真面目に、かつ丹念に行っていたことが分かり、「地道な努力が成果を生む」という本文中の忠敬のセリフが心にしみみます。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

●硬い本のイメージがあったが、楽しく読後感が良い本。当時の50歳は「おじいさん」だと思うが、蝦夷まで歩いていくことに驚いた。忠敬の熱心な性格、姿勢は素晴らしい。測量の旅に、平次の父探しが加わることで、楽しめる内容になっている。解説は読みやすく分かりやすく、勉強になった。興味はなかったけど、こういう人がいたから今の日本があると思い、忠敬に感謝した。

●伊能忠敬は前から好きで、歴史上の人物の中ではヒーローの一人。このような偉業を50歳を過ぎて成し遂げることが、今の自分にできるかと考えてしまう。本文中の丁寧な解説が嬉しかった。忠敬たちが一歩ずつ丁寧に歩いて地図を作ったということは、簡単には想像できないけど、解説のおかげで理解できる。このデジタルの時代に、アナログの原点を知ることは大事だと思う。

●タイトルは、伊能忠敬に合っていていいなと思った。伊能忠敬の事業は好きで、惹かれる。物語の進み具合によって解説が挟まっているのがよかった。アイヌ文化のことも、きちんと書いてくれている。伊能忠敬の偉業についてだけでなく、冒険物語、科学もの……など、いろんな要素を含んでいる本なので、ただの伝記より、読者層が広いと思う。

●ストーリーの流れを一気に読みたい人は、この解説は邪魔かも。でも、子どもの理解を助けるには必要な情報。事実をもとに、物語を緻密に組み立てることが上手な作家さんだった。50歳を過ぎても、まだまだやれる！チャレンジしていかないといけない！と感じる。思いの強さ、強固な意志の力を持っていれば、なんでもできるんだな。平次がその後どうなったか、続きが読みたい。

●面白く読み始めた。算数や理科は、いろんなところで役に立つんだなと思える。興味の持ちどころはそれぞれ違うと思うので、後につながるような本。地図作りのプロセスにもびっくりした。面白かったのは、秀蔵と平次が、自分の親について話す場面。忠敬が平次に「学問とは？」と問うシーンでは、同じことを今の小学生に問うたとき、答えられるだろうか？と考えてしまった。

次回 7月11日(木) 10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『かべのむこうになにがある?』

ブリッタ・テッケントラップ/作, 風木 一人/訳 BL 出版